かな文字を読む　解答

史料「熱海遊簿」明治七年（一八七五）五月二十五日条　〔小室家文書No.二七一〕

廿五日（壬午月曜）　厚木出立、一里許の間霧雨ふり出し、蝙傘の雫に衣を湿すも又一里許にして快晴、田村（大住郡）・八幡・四ノ宮ノ諸村を過、平塚新田八幡の神社を拝す、石灯籠に寛文の銘あり

陶綾郡大磯駅宮経山延台寺（日蓮宗）に虎か石を見る、見料弐銭、角半昼食

鴫立庵寿道を訪ひ白雄居士か秋風の句碑に燕子花を折て捧く

正面に西行堂あり、木像ハ高雄の文覚上人自作といふ、傍に虎尼の堂あり、其側に東往舎三千風の翁西上人五百年忌を弔する長歌あり

心なき　身にも哀ハ　しられけり　鴫立沢の
秋の夕　暮とよまれハ　とはのゐん　北面の武士
のりきよの　かしらおろして　つゐの身ハ　西へ行名の
しるしにや　仏道歌道　いミしくて　見ぬ世の旅の
門いての　命なりけり　佐夜の山　うつの山への
うつゝなき　風になひきし　ふしのねの　けふりとならん
身のひまを　あくる箱根や　こよろきの　いそけと告る
友ちとり　ともねの鴫の　沢水の　めいほくなれや
新古今　三の夕の　名ところを　したふや時の
和歌所　あすか井雅章　駕を立て　折しも春の
あハれさハ　秋ならねとも　しられけり　鴫立沢の

証歌ゆへ　我もあんきやの　笠松や　月より外ハ
とふ人も　嵐のよする　高すなこ　かきならしつゝ
この沢の　あるしをねかふ　さちありて　その名高尾の
もんかくの　なた作りてふ　ミゑい堂　和歌三神や
虎心堂　猶五智尊を　かいきせし　宗雪居士の
はか所　吾身もこゝに　夜台して　謡につくり
あるハ又　田鳥集に　国々の　詩歌連俳
あつめつゝ　五百年忌の　たむけまて　満願セしを
我国の　いせのいさこの　友つ人　施入をなして
たのもしや　心なき身の　西へゆく　道しるへにと
立しいしふミ

東往居士三千風
元禄十三暦辰二月望日　誌之

西上人真蹟色紙一枚
　つれもなくなり行人のことの葉そ秋よりさきのもみち成けり
同竹杖五尺弐寸壱節壱本
飛鳥井雅章短冊
　弥生の頃鳴たつ沢に立寄侍りて
　あハれさハ秋ならねともしられけり鳴たつ沢の昔たつねて
松平左近将監乗邑
　宝永二年秋通りける時
　今も猶むかしの秋をおもふそよ鳴たつ沢の夕くれの空
其他数品縦観して前川小憩、酒匂川橋銭六厘五毛、四時
小田原駅古清水伊平に宿す、此所より豚児并高山君云々
贈る信書を郵便局ニ托す